

中国・東北三省歴史の旅（4/4）

ハルビンの朝は寒くて雨だった。前日の夕食は初めて食すデザートに恵まれ、会話も弾み、ぐっすり眠って気持ちよく目覚めた。だが、この旅で初めての雨天と知り、実質上では最後の行動日だったので、むしろありがたく感じた。この旅で最も辛い1日になることが分かっていたので、むしろ雨がふさわしい、と感じたのだろう。



専用車は雨の中を走った。目指すは731部隊博物館（正式名称：侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館）。運転手はなぜかソ連与中国の旗を運転席に掲げていた。車が随分走ったところで異様な建造物が目に入った。



館内は、6か国語表記だった。ふとワルソーゲットーを思い出した。同じくそこも6か国語表記だった。ドイツが自ら建設した同様の施設で、ユダヤ人迫害の遺跡を後世に残すために自ら整備した。国民に新生ドイツを実感させるだけでなく、隠し事をして、未来世代に恥ずかしい思いをさせたくない、との想いだろう。自ら「人間はこのような間違い犯しかねない」と示して見せる施設の1つだ。そこに私はドイツの自信のほどを見た。それがEUを成立させ、その盟主のごとき地位を得させ、アメリカと、いわんや中国などとタイで渡り合い、友好的な地位を得て、欧州の安全保障に貢献している。

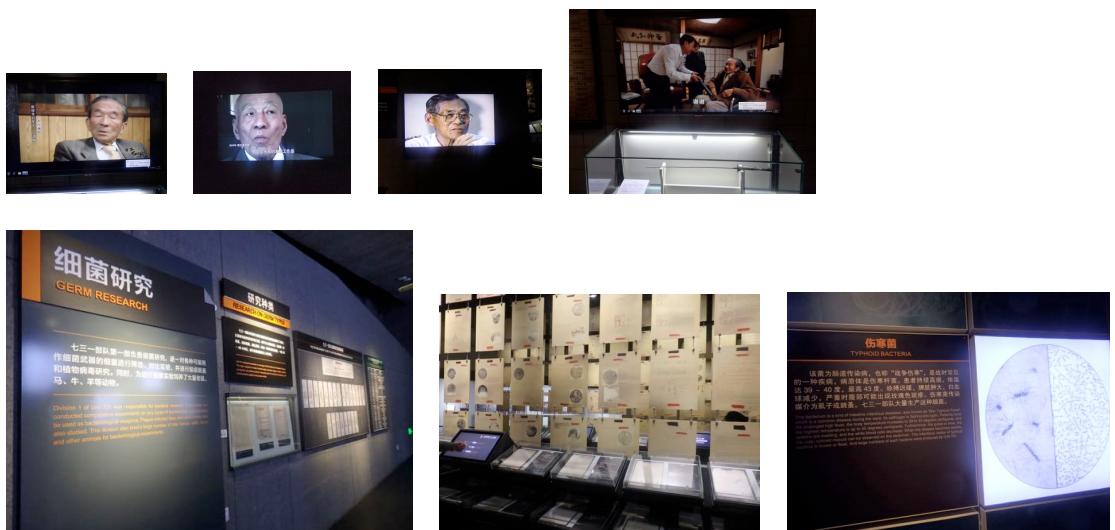
731 部隊博物館では、証拠となる書面、写真、記事、証言、模型だけでなく、遺品や今も発掘が続く遺跡などによって、過去の事実と関係者などを時系列に、分析的に、あるいは部門別に展示している。だから、日本では敗戦後も（ドイツでは当時の戦犯には時効がなく、今も追跡しているが）関係筋の職責を得て活躍していたことも教える。

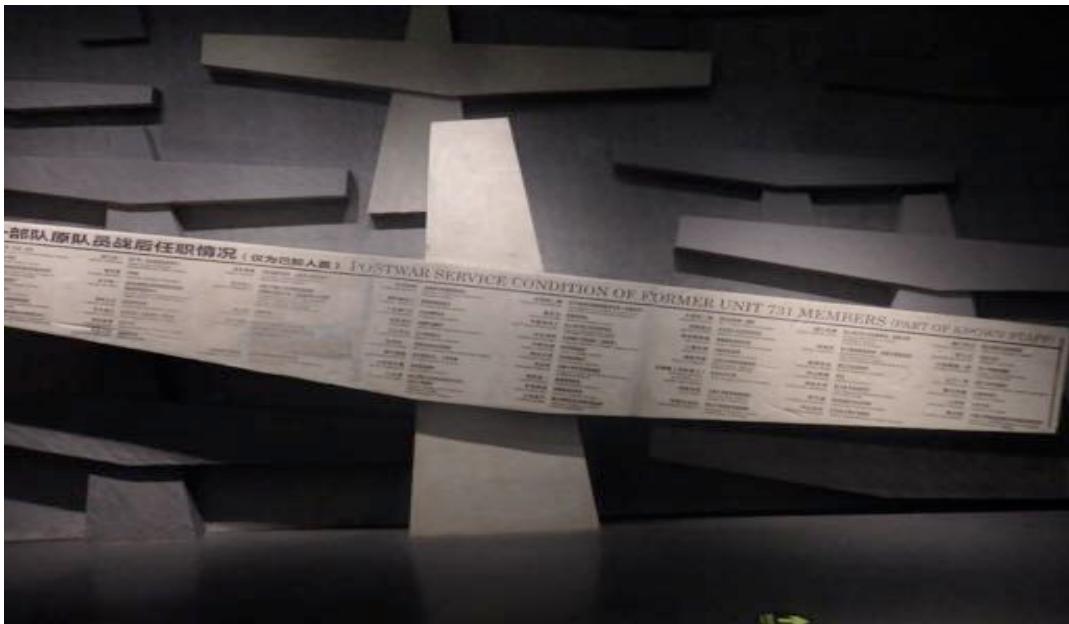


もし私が15年早く生まっていたら、と考えてしまった。標榜を信じて入隊し、命令に忠実に従い、命を捧げていたに違いない。そう思って、背筋が冷たくなった。いったん踏み込んでしまえば、簡単には辞表など出せなかっただろうし、身動きならなかつたのではないか。おそらく、妻子や親に信じさせた職務や責務と、現実があまりにも懸け離れており、説明できなかっただろう。それほど人の道を踏み外した施設だった。



多くの元軍医や関係者が、実態を明らかにするための要請に応じ、証言している。





日本では、敗戦後に、政界や自衛隊だけでなく医学界などでも、戦前の要職にふさわしい要職を得て活動していた、あるいは活動していることを明らかにしていた。そこで、帰国後に少し調べごとをして、幾つかの謎が解けたような気分になった。



731部隊は、日本兵の感染症予防、衛生的な給水体制、極寒対策、あるいは性病対策などにあたった。だが、同時に、細菌戦に使用する生物兵器の研究・開発をしており、人体実験や生物兵器の実戦的使用などを行ったことをつまびらかにしている。





生物化学実験には主に中国人が組織的に拉致され、専用鉄道などでこの施設に送り込まれ、疫病や極寒などの強制曝露実験などの対象にされた。その対象は、妊婦などにも及び、「マルタ」と呼ばれた。もし私がならまだしも、妻や母が中国に生まされていて、この対象にされていたら、と考えてしまい、いたたまらない気持ちになった。仮にそれが私なら、運命の巡り合わせをどのように整理したか、と忸怩たる気持ちになった。



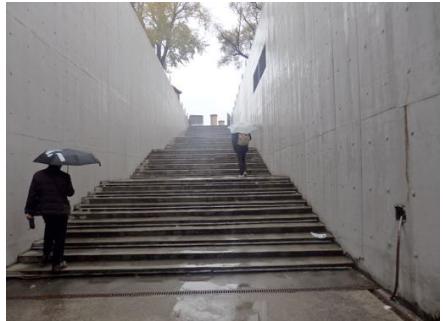
マルタの人数は、所説ある。川島清軍医少将（731部隊第4部長）の証言(終戦後、ソ連が行ったハバロフスク裁判)によると 3,000 人以上。生体解剖は年に 100 人程度、総数 1000 人未満という推定数字もある。

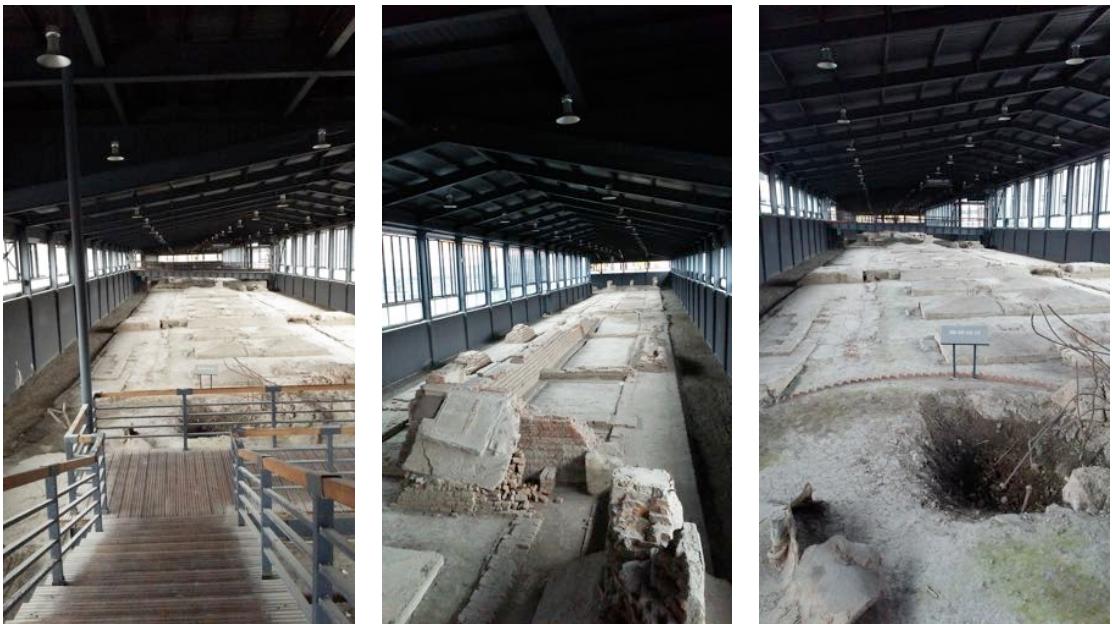
問題は終戦後。生存していた 40~50 人の「マルタ」は証拠隠滅のために殺害されたらしい、ということだ。ありうるだろう。日本国内でさえ、治安維持法など

で捕え、拷問で悲惨な姿になった多くの被疑者を終戦後に証拠隠滅している。当時は、平和主義や人権主義者は過激な思想の持主とされ、拷問死させられている。



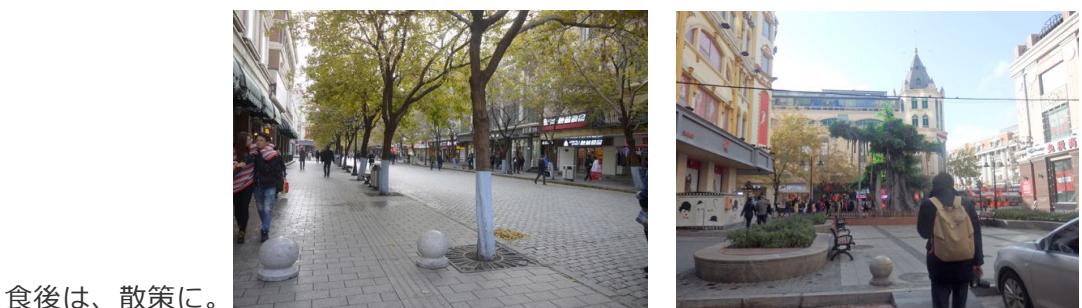
この施設にも大勢の日本人が見学に訪れ、さまざまな足跡を残しており、入り口では日本語版の解説書のみが品切れしており、少しは心が和らいだ。





発掘はまだ続いている。なぜこれほど悲惨な事実を次々と発掘し、白日の下にさらさなければならぬのか。人間の性の実証として理解し、平和を希求する手段として評価する。私だが、ここまで努力を傾け続けなければならない状況を、またもや恨めしく思った。

ハルビンでの「昼食はロシア料理を」となり、初めて口にするものが多く、食し方を教えてもらうなど、楽しくて美味。商社時代にソ連で知った事情とは大違い。



食後は、散策に。



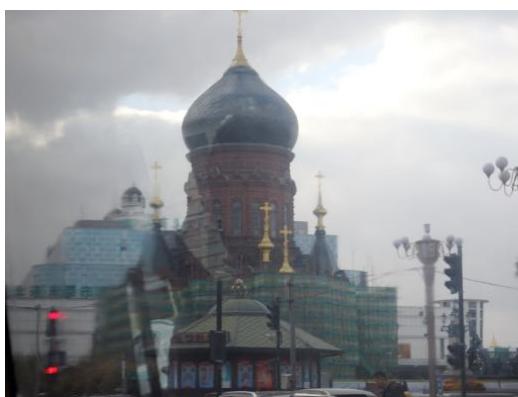
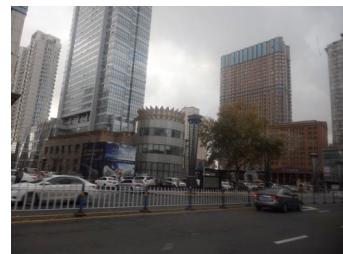
ロシアとアメリカが並んでいた。仲良さそうで、ホッ！



この人の同道が、この旅を現実化させたわけで、改めて感謝。



とても冷えた。薄着の劉穎さんに、宮崎さんが、自身がデザインした自社製タオルマフラーをプレゼント、私も温かくなった。鉄橋を渡るとロシア。スターリン公園を覗いた後、街に出て、ロシア正教会を経て、百貨店まで足を延ばした。





最新鋭の百貨店！と見ていたら、19周年を祝っていた。こと百貨店のありようで言えば、わが国の3倍以上のスピードで進化したことになる。「明朝は早いので」と空港の側で泊まることになった。夕食は若者好み。最初にして最後の、揃っての記念写真なのに、劉穎さんは後ろに引っ込もうとする。無理やり前に出ていただいた。



入れ違いのように首相が訪中。未来世代のためにも眞の日中関係を、と切に願った。

楽しい4泊5日だった。皆さんありがとうございました。ちょっと私は緊張して、ほとんどノートをとらずに済ました初の海外旅行になった。「余念なしに！」と出掛けた旅ゆえに、滞在中は、突っ込んだ話ができず、意見が述べられず、残念だった。それだけに、と報告書に力を入れた。少しほ勉強もした。そこで、思うところを思うままに綴ることにした。もちろん、思い違いや、前後の間違いはもとより、調べたらないことが多いかもしれない。だが、感じたことはこの通りだし、創作はないつもり。

劉穎さんに無理強いしたが、鈴木さちよさんはじめ同道願えた皆さんノートパソコンおかげで、なんとか楽しくて、有意義な旅になった。このような旅なら、せめてもう一度、と願わずにはおれない。



なぜ皆さんお笑いか、私には覚えがないが、とりわけ宮崎陽平さんが大笑い。とても私も嬉しいし、ホッ！ 皆さんありがとうございました。